子どもはみんな問題児。を読んで

「子どもはみんな問題児。」というタイトルを見た時、おそらくこの言葉に反論する保育者は少ないだろうなと感じた。そして、だからこそかわいいと思ったに違いないと思う。しかしどうして子どもは問題児なのだろうか…。

　それはきっと、この本でも述べられていたように、子どもはいつでも大人の予期しない事を行うからではないかと思う。この本では一つ一つの目次事に、子どもとその保育者のリアルが良く描かれているなと感じた。自分が泥んこになっていることさえ忘れて思いきり遊ぶ姿や、興味のある事への好奇心からやってはいけないと言われている事に対しても手を出してしまう姿、根も葉もない嘘を得意げに話したりする姿は、大人からすれば止めて！と言いたくなる事ばかりでまさに問題児。しかしそれが子どもらしさなのだとこの本では伝えていた。子どもには一人ひとりに個性があることを再認識し、それを大事に保育する。皆が同じ方向に向かって倣える事は保育者や母親にとって都合の良いことであり、並足を揃えるだけが良い保育、子育てではないと言う事を知らされているようだった。

　私のクラスにもすばらしい問題児が何人もいる。時々頭を抱えたくなってしまうような事も起きるが、一人ひとりに目を向けると本当に可愛く愛おしい。素直で一生懸命、いろいろな事に興味を持つ。一人ではまだまだ難しいこともあるが、みなに手伝ってもらい良好な人間関係を持ちながら快適に生活している。してもらうのも、してあげるのもいい。それが自然とでき、その中で自分も自分以外の人も本当に大切な存在なのだと言う事を分かってもらえるような環境を作り続けることが、私のしていかなければならないことなのだと思う。

　さて、そんなさまざまな個性を持つ子ども達であるが、どの子にも共通して言えるものがあった。それはお母さん、遊び、絵本が大好きだと言う事だ。それは日々の保育を通して常々感じている。特に長期休み明けの絵本の読み聞かせには子どもたちの喜びがいつにも増して伝わってくる。何が読まれるのだろうと目をキラキラさせて集まり、何を言わなくても「早く読んで！」という気持ちが身体いっぱいで表現される。物語が始まってからは作家と一緒になって考え、感じ、悩み、悲しみ、喜ぶ。子どもたちのその時の表情は素直で無邪気で心から可愛いと思う。私はその時間が楽しくて、大切で、大好きだと思う。きっと子ども達は絵本を通してもいろいろな心の経験を積み、人間として生きる上での大切な「生きる力」を育てているのだろう。

　子どもは問題児。そう言えば世の中では非難されることも少なくないと思う。「みんな違ってみんな良い。」もちろんそうであるが、みんな違うからこそ、育てる側は大変と言う事なのだ。「みんな違って大変だ。」保育者からすればこちらの方がピンとくる。しかしその大変さこそ子どもを育てることの遣り甲斐であり、その子一人ひとりの個性が光っている証拠なのだと思う。しらさぎ幼稚園にはたくさんの問題児がいる。その問題児を心から可愛いと思っている保育者がいる。その現実を「ああ、良かったな。」と私は思う。そしてこれからも、子どもらしい子どもを園全体で大切に育てていきたいと思う。